

自己愛傾向に着目した攻撃性喚起場面の内的過程に関する探索的検討

—無関心型および過敏型自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連から—

相談研修員(臨床心理学分野大学院生) 蛭田陽子
相談員(臨床心理学分野准教授) 田名場忍

【キーワード】自己愛傾向, 過敏型, 無関心型, 攻撃性喚起場面, 外向攻撃性, 内向攻撃性

1. 問題と目的

1.1. 自己愛とは

1) 健康的自己愛と不健康的自己愛, および不健康的自己愛における無関心型と過敏型

自己愛(narcissism)はフロイト(1969)によって初めて体系化された概念である。フロイトは自己愛を一度は対象に向けられたリビドーが再び自我へと向けられる不健康的な状態と規定した。しかし後に Kernberg(1975)やコフート(1994)らから、自己愛には精神生活を営む力となるような健康的な側面もあることが主張された。

Kernberg(1975)によると不健康的な自己愛は、養育者から拒絶されたり見捨てられたりした結果、防衛のために誇大な自己像(誇大自己)が形成され、この自己ヘリビドーが向けられることで成立する。こうした不健康的自己愛は、誇大自己への没入から顕在的な誇大性を持ち、周囲を気にしない特徴として表われる。一方コフート(1994)によると不健康的な自己愛は、養育者との不適切な関わりによって、例えば人が生来もつ「誉められたい」という自然な欲求が満たされなかったり、養育者が自分の都合のみに沿って過度な賞賛を行ったりすることで成立する。このような不健康的自己愛は潜在的な誇大性を持ち、他者からの非難を避け承認を得ようと周囲を過剰に気にする特徴として表われる。

両者の理論は Gabbard(1994)によってまとめられ(表 1)、無関心型と過敏型の自己愛として、連続体の対極に位置するとされた。本研究では、Gabbard(1994)の考え方を前提として、自己愛には健康的側面と不健康的側面があり、不健康的自己愛は無関心型と過敏型とに分類されると考える。

表 1. Gabbard(1994)による自己愛パーソナリティ障害の 2 類型(蛭田, 2011)

周囲を気にしないタイプ(無関心型; Kernberg の理論に近似)	周囲を過剰に気にするタイプ(過敏型; Kohut の理論に近似)
<ul style="list-style-type: none">・他者の反応に気づくことがない。・傲慢で攻撃的である。・自己陶酔的である。・「送信機はあるが受信機は無い」ような人である。・他者によって傷つけられたという感情に鈍感であるように見える。	<ul style="list-style-type: none">・他者の反応に過敏である。・抑制的か、内気か、あるいは自分を表に出すことさえしない。・自己よりも他者の方に注意を向ける。・軽蔑あるいは批判されていないかどうか、注意深く他者の話に耳を傾けている。・傷つけられたという感情をもちやすい。恥や屈辱感を感じやすい。

2) 不健康的自己愛における臨床水準と非臨床水準

不健康的自己愛の状態が病的水準に至ると自己愛性パーソナリティ障害(Narcissistic Personality Disorder; NPD)に陥ることがある。NPD の診断基準は精神疾患の診断・統計マニュアルⅣ(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-Ⅳ; DSM APA, 2000 高橋・染矢・大野訳, 2003)で表 2 のように定められている。臨床現場では NPD 患者が激しい攻撃性を示す事例が多く報告されており(川上・宮田・杉村・中村・小野・牛島, 2001; 小野, 2005 など)、先行研究では臨床群の不健康的自己愛、例えば自己愛性パーソナリティ障害と攻撃性との関連について検討が重ねられてきた。

一方で臨床群に留まらず非臨床群についても、不健康的自己愛の特徴がみられる場合があるとして、自己愛をパーソナリティ変数のひとつ、すなわち自己愛傾向と位置づけて測定する質問紙、自己愛性人格目録(Narcissistic Personality Inventory; NPI, Raskin&Hall, 1971)が開発された。NPI の開発以降、自己愛の研究領域では非臨床群の不健康的自己愛、すなわち自己愛傾向と攻撃性との関連を検討する研究も多数展開されている。

表 2. DSM-Ⅳ-TR による自己愛パーソナリティ障害の診断基準 (APA, 2000 高橋他訳, 2003)

誇大性(空想または行動における)賞賛されたいという欲求、共感の欠如の広範な様式で、 成人期早期までに始まり種々の状況で明らかに。以下のうち 5 つ(またはそれ以上)で示される。	
1. 自己の重要性に関する誇大な感覚。自分の業績や才能を誇張する。	
2. 限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。	
3. 自分が特別であり、独特であり、他の特別なまたは地位の高い人(権威的な機関)にしか理解されない、または関係があるべきだと信じている。	
4. 過剰な賞賛を求める。	
5. 特権意識、つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。	
6. 対人関係で相手を不当に利用する。つまり、自分自身の目的を達成するために他人を利用する。	
7. 共感の欠如。他人の気持ちおよび欲求を認識しようとし、またはそれに気づこうとしない。	
8. しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思込む。	
9. 尊大で傲慢な行動、または態度。	

3) 健康的自己愛と不健康的自己愛、および不健康的自己愛の臨床水準と非臨床水準

ここまで自己愛を健康的自己愛と不健康的自己愛に二分し、不健康的自己愛を無関心型と過敏型に分類した。不健康的自己愛は臨床水準と非臨床水準とに分けられるので、これらをまとめると表3のようになる。ここで健康的自己愛と不健康的自己愛、ひいては非臨床水準の不健康的自己愛との相違にも触れておきたい。自己愛の健康性と不健康性については、既に多くの考察がなされている(相澤,1999; 中村,2004; 池田,2010 など)。それぞれの研究において健康的自己愛の定義や不健康的自己愛との異同に対する精緻な見解が提出されているものの、この問題に一貫した結論は得られていない。こうした中で蛭田(2011)は自己愛をめぐる概念の整理を試み、健康的自己愛と不健康的自己愛を規定する要因の一つに、誇大自己が他者との関係の中で了承可能な程度に調整されているかどうかという視点を提出している。既存研究を概括すると、健康的自己愛は不健康的自己愛が臨床水準までには至らない、あるいは日常生活を送る上での活力として作用するものととらえられるのに対し、不健康的自己愛は、誇大自己の保持方略によって他者に対する無関心さや過敏さを呈し、臨床水準から非臨床水準に至るまでの様々な問題を引き起こすものととらえられる。両者を隔てる要因は、他者との関係に無関心あるいは過敏にならざるを得ない誇大自己の非現実性に本人が無自覚で、誇大自己こそが実際の自分であるかのように感じられているか否かという点にあり、誇大自己が現実的な範囲に調整されていれば、自己愛は実際の自分よりも「優れた自分」を感じることで、高揚感を伴う理想や野心へ繋げる肯定的な作用をもつのではないだろうか。本研究では、こうした蛭田(2011)の考えに基づいて健康的自己愛と不健康的自己愛を区別する。また不健康的自己愛における自己愛傾向と自己愛性パーソナリティ障害、すなわち非臨床水準と臨床水準についても、上記の蛭田(2011)をもとに区別する。つまり誇大自己と実際の自分とが混同した不健康的自己愛の状態にあっても、誇大自己を保つための無関心さあるいは過敏さが他者との関係の中で許容される程度であれば非臨床水準であり、対人関係や社会生活に支障を来たような場合には臨床水準に移行するものと考えられる。

表3. 本研究における自己愛の構成

自己愛	健康的自己愛		不健康的自己愛	
			無関心型	過敏型
自己愛			自己愛傾向	
			非臨床水準	臨床水準
			自己愛性パーソナリティ障害	

1.2. 自己愛傾向と攻撃性

1) 無関心型自己愛傾向と攻撃性

無関心型および過敏型自己愛の特徴(表2)とNPDの診断基準(表1)とを比較すると、NPDの診断基準が無関心型自己愛の特徴と似通っていることをみても、NPD患者は無関心型の特徴をより強くもつと換言できよう。加えて前掲のNPIはDSM-IVのNPD診断基準に基づいて作成された経緯があり、そのことから主に関心型を測定する尺度ととらえられる。そのためNPIを用いて自己愛傾向と攻撃性との関連を検討した諸研究(相良・相良,2004; 福島,2007 など)の結果は、無関心型と攻撃性との関連についての知見を示してきたといえよう。これら研究の結果は、ほぼ一貫して無関心型自己愛傾向(以下、無関心型)の高い者が高い攻撃性を有することを示しており、下位尺度の中では特に言語的な攻撃性の高さと強く関連することが報告されている。ところがこうした研究では同時に、自己愛傾向の側面である優越感や有能感の高い者が、認知的な攻撃性としての敵意をもちにくいの結果も示されている。無関心型は自分の優秀さが自他ともに明らかであると確信しているので、他者からの悪意や軽視などを感じることは少なく、他者からどう思われるかにもあまり頓着しない。そのために他者へ否定的な信念をもちにくく、言葉による攻撃性を表出しやすい傾向を備えていると考えられてきた。

2) 過敏型自己愛傾向と攻撃性

無関心型と比較して過敏型自己愛傾向(以下、過敏型)と攻撃性との関連を見出した研究は少数である。しかし日本では過敏型の自己愛傾向が多くみられることが指摘され(福井,1998)、同時に過敏型はスチューデント・アパシーや不登校、対人恐怖や摂食障害など、青年期に多く見られる社会的不適応との関連も指摘されてきた(中村,2004)。こうしたことから近年では無関心型だけではなく、過敏型に関する研究にも注目が集まりつつあるといえよう。

過敏型と攻撃性との関連について、中川(2004)は事例を検討する中で、過敏型について「他者からの低い評価を敏感に感じとり『自己愛』が深く傷つき、その傷つきが他者への攻撃へ変貌する」と述べるとともに、事例の人物が周囲から「大人しくて目立たない」「どこにでもいる普通の子」「よい子」と証言されていたことに言及し、過敏型が他者への攻撃性を表出したり抑制したりする背景に自己愛の要因があることを示唆している。加えて山崎(2008)は、過敏型が他者への攻撃性をもちながらも、周囲に気兼ねする性質のために表出が抑制され、攻撃性が自分に向けられる可能性があると考えて、攻撃性の方向に着目し、無関心型および過敏型との関連を検討した。攻撃性の方向とは、一つに暴力や暴言など他者へ向けられる外向的な攻撃性(以下、外向攻撃性)、もう一つに自責感や自傷など自分の心身に向けられる内向的な攻撃性(以下、内向攻撃性)の2方向である。この研究では、過敏型の攻撃性そのものは無関心型よりも高い可能性があり、その中でも特に内向攻撃性の高さと関連するという結果が示された。一方同研究において過敏型と外向攻撃性との関連は示されず、山崎(2008)はこの結果の背景について、外向攻撃性の尺度の中に複数の要素が混在したためではないかと述べている。

3) 対人関係の違いによる無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性、怒りの原因帰属との関連

蛭田・田名場(2012)は、無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性、さらには両攻撃性下位尺度との関連を検討した。その結果、無関心型は外向攻撃性全体および言語的な外向攻撃性が高く、内向攻撃性全体および感情的な内向攻撃性(自責感)が低いことが示された。一方、過敏型は外向攻撃性全体および認知的、情動的な外向攻撃性(敵意、短気)が高く、内向攻撃性全体および感情的、行動的な内向攻撃性(自責感、自己破壊行動)が高いことが示された。無関心型および過敏型がもつ他者への無関心さあるいは過敏さの特徴が誇大自己の保持のために機能していると考え、無関心型の自責感の低さは周囲だけでなく自分の内省にも無頓着であることで誇大自己の保持機能を果たすように思われる。過敏型の内向攻撃性は外向攻撃性を表出した場合に誇大自己の保持に必要な「他者からの承認」が失われることを恐れて、社会的に受け入れられやすい「自分を責める」という方向に転換された結果なのではないだろうか。

また、前川・宮本(2006)は、共感性の欠如や自己愛的同一視といった自己愛的対人態度の表われと相手との関係との関連について検討し、自己愛的対人態度が親よりも友達、さらに恋人に対して起こりやすいことを指摘した。浅利(2013)では、自己愛傾向者の対人場面における怒りの特徴を P-F スタディによって検討した結果、無関心型は対人場面での怒りの原因を自分もしくは不可避の出来事に帰属し、後悔や自責の念をもちやすいこと、過敏型は対人場面での怒りを他者もしくは状況へ帰属する傾向があることが示された。これらの知見から自己愛傾向者はその型によって、攻撃性の表われ方や怒りの原因帰属の面で異なった様相を呈すること、また自己愛的な対人態度の表われ方が相手との関係によって異なる可能性がうかがえる。加えて蛭田(2011)は、自己愛傾向を検討する際、不健康的自己愛と健康的自己愛の差異に関わる要因と考えられる点から、個人と他者との関係に注目することの有用性を指摘しており、他者との関係についてその続柄だけでなく、信頼感や親しみなどのより質的な側面にも焦点を当てることの重要性を示唆している。

1.3. 本研究の目的

先行研究では、無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性との間にそれぞれ異なる関連が示されてきた。自己愛傾向者の攻撃性が誇大自己の保持機能によると仮定すると、攻撃性は誇大自己を傷つけるような外的刺激に対して喚起されると考えられる。誇大自己への脅威となる刺激とは、自己愛者が期待した好ましい反応が得られなかったり、軽んじられた、侮蔑されたと感じたりすることだろう。この時、無関心型は対象に反撃する一方で誇大自己を自ら揺らがせる恐れのある内省や自責感を積極的に回避し、過敏型は対象に反射的に怒りを抱きつつも他者からの承認を失うことによる更なる誇大自己の傷つきを免れるために攻撃性の方向を自己へ転換するといった過程が想定される。加えて、無関心型は、周囲に何らかの反応を期待しかなわなかった場合の攻撃性喚起とは別に、周囲を斟酌せず振る舞う傾向が外向的な攻撃性の高さとして表われている可能性も考えられる。尺度上の傾向あるいは表面的な態度、言動としての攻撃性が本人にとってどのような意味をもつのか、主観的な位置づけを含めた検討が必要だろう。また、先行研究では自己愛傾向の型や相手との関係によって怒りの帰属や対人態度等の諸特徴の表われ方が異なることも指摘されてきた。外向・内向攻撃性が自己愛傾向の型によって異なる様相をもち、さらに相手との関係性などによってその表出も変化するとすれば、自己愛傾向と攻撃性との関連について検討を進めるためには、個人に焦点を当ててより詳細な検討を行うことが望ましいと考える。

そこで本研究では、無関心型および過敏型自己愛傾向と外向・内向攻撃性の関連を、個人のエピソードに焦点を当てて探索的に検討することを目的とする。そのために、個人の自己愛傾向と攻撃性の特徴を質問紙調査でとらえた上で、攻撃性喚起場面における個人の感情や周囲の状況等の継時的変化を含めた個人の内的過程について面接調査によって明らかにしたい。

2. 方法

2.1. 調査協力者・調査時期

調査協力に応じた女子大学生 2 名(平均年齢 20 歳)に対して、それぞれ 2013 年 8 月と 10 月に質問紙調査と面接調査を実施した。

2.2. 手続き

調査の目的と概要を記載して調査協力者を募るチラシを大学内に掲示した。参加を希望した調査協力者にまず質問紙を配布して回答を求めた。調査者は、質問紙の結果をまとめた上で、後日に面接調査を行った。面接調査では、まず調査協力者にワークシートへの記入を依頼し、記入された内容について半構造化面接質問項目にしたがって面接を行った。その後質問紙調査の結果を提示し、結果に対する感想を聞いた。ワークシートと半構造化面接質問項目の内容は後述する。

2.3. 質問紙調査の構成

質問紙調査は以下の構成で実施した。

- 1) 無関心型自己愛傾向 小塩(1998)による日本語版自己愛性人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory-Short version; NPI-S)から下位尺度を選択して用いた。この尺度は「自己主張性」「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」の3下位尺度各10項目、全30項目について5件法で回答を求めるものである。「自己主張性」は無関心型、「注目・賞賛欲求」は過敏型、「優越感・有能感」は自己愛傾向全体の高さを測定するとされ(小塩,2004), 山崎(2008)を含め自己愛傾向に関する従来の多くの研究では、過敏型と無関心型を測定する際に NPI-S を使用している。しかし、この尺度は DSM の診断基準を基に作成され、無関心型の測定項目に偏っている。そこで、本研究では過敏型を測定するとされる「注目・賞賛欲求」を削除し、無関心型の測定に NPI-S の下位尺度「自己主張性」「優越・有能感」各10項目、計20項目のみを用いることとした。
- 2) 過敏型自己愛傾向 コフト(1994)の理論に基づいて作成された上地・宮下(2009)による自己愛的脆弱性尺度短縮版(Narcissistic Vulnerability Scale; NVS)を用いた。この尺度は「承認・賞賛過敏性」「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」「自己緩和不全」の4下位尺度各5項目、全20項目について5件法で回答を求めるものである。
- 3) 外向攻撃性 安藤・曾我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・坂井(1999)による日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(The Japanese Version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire; BAQ)を用いた。この尺度は「身体的攻撃」6項目、「言語的攻撃」5項目、「敵意」6項目、「短気」5項目の4下位尺度、全22項目について5件法でたずねるものである。
- 4) 内向攻撃性 安立(2001)の攻撃性質問紙(本研究では Adachi Aggression Questionnaire の頭文字を取って AAQ と称する)から下位尺度を選択して用いた。この尺度は「自責感」7項目、「自己破壊行動」5項目、「猜疑心」4項目、「対象攻撃行動」8項目、「積極的行動」9項目の5下位尺度、全33項目について5件法で構成される。本研究ではこの下位尺度のうち、「自己に向けられる否定的感情」を測定する「自責感」と「自分に向けられる、破壊的で衝動的な行動」を測定する「自己破壊行動」計12項目を使用し、5件法での回答を求めた。

2.4. 面接調査におけるワークシートと半構造化面接質問項目

攻撃性が喚起された場面について、関連する要因や生じた欲求、実際の行動、攻撃的な感情の変遷、周囲の反応などを手がかりに個人の内的過程を探索的に検討するため、現実の攻撃性喚起場面に近い内容を扱える面接を考案した。自身の体験として現実の攻撃性喚起場面を想起し語ることは、調査協力者の陰性感情を過度に刺激し不利益を生じさせる可能性がある。また、出来事への直面化を避けたり、調査者に与える印象を社会的に望ましくしたりしようとして、開示が阻害されることもあるだろう。こうした可能性を完全に統制することは極めて困難である。そこで調査協力者が自らの体験を想像上の人物に投射する形式を用いることとし、次のような内容のワークシートを用いた面接を試案した。

調査協力者にある人物「A さん」のことについてできるだけ具体的に想像してもらおう。A さんは調査協力者にとってもよく似た感じ方、考え方をもっていて、調査協力者には A さんが感じたり考えたりすることや実際に行うことが手に取るように分かる。A さんが攻撃的な感情をもったり、実際に攻撃的な行動をしたりするのはどのような時だと思うか。想像して、その内容について話しをする。

面接方法は、試案について臨床心理学分野に所属する大学院生3名と教員1名との検討の機会をもち、改善点などの指摘を受けて改定版を作成した。また、改定版は同所属の別の大学院生2名に体験してもらい、感想などを聞いて改良を加え、実施版とした。ワークシートおよび半構造化面接質問項目は表4にまとめた。質問の順序や表現は会話の流れによって適宜調整して用いた。

なお、面接に当たっては、調査協力者に個人情報守秘を説明し、その上での研究上の使用と論文記載、および録音について了承を得た上で承諾書に署名してもらった。また、質問紙の結果を提示する際には、結果が示すのは個人の側面の一つで、絶対のものではないことを提示用紙に記載し、口頭でも伝えた。

表4. 面接調査のワークシートおよび半構造化面接質問項目	
ワークシート	
A さんが攻撃的な気持ちになったり、実際に攻撃したりした時のことについておうかがいします。	
どのようなことがありましたか。	
・いつ(年月日、時期など)	
・どのような場面(学校の授業中、アルバイト中など)	
・かかわっていた人(友達の〇〇さん、家族の〇〇さんなど)	
その時、A さんの気持ちは…	
その時、A さんがしたことは…	
A さんがしたことと、A さんの気持ちは…	
A さんがしたことと、A さんの周りは…	

半構造化面接質問項目	
1	どのようなことがあったでしょうか(できごと)。
2	それはいつ、どのような場面であったことですか。
3	誰が関わっていましたか。
4	なぜそうなったのですか。
5	その時 A さんが攻撃的な気持ちをもった相手やものは何ですか。
6	その気持ちを A さんの言葉で表現するとどのような気持ちでしたか。
7	なぜその人やものにそのような気持ちをもったのですか。
8	その時 A さんはどのようにしたいと思いましたか。
9	その時 A さんはどのようにしましたか。
10	なぜそのようにした/できた/してしまったのですか。
11	その行動によって、A さんの気持ちはどのように変化しましたか。
12	その行動によって、A さんの気持ち以外にはどのような変化がありましたか。
13	A さんがそのように行動しないとしたら、それはどのような時ですか。
14	それはどうしてですか。
15	この気持ちの流れは、他のできごとにもあてはまる流れでしょうか。
a.	あてはまるとしたら、特にどんなところがよくあることですか。
b.	あてはまらないとしたら、この気持ちの流れはどんなところが特別でしたか。また、よくある気持ちの流れはどんなものですか。
16	ここまでお話しをしてきて、気づいたり考えたりしたことや感想などを聞かせて下さい。

3. 分析方法と結果

3.1. 質問紙調査の分析方法と結果

各尺度および下位尺度ごとに合計得点を算出した。NPI-S の合計得点を無関心型得点、NVS の合計得点を過敏型得点、BAQ の合計得点を外向攻撃性得点、AAQ の合計得点を内向攻撃性得点とした。調査協力者それぞれの自己愛傾向と攻撃性の特徴を集団内での位置という側面からとらえるため、調査協力者の所属する大学の学生 98 名(男子 39 名,女子 59 名; 平均年齢 18.70 歳)を対象に行われた同じ構成の質問紙調査(蛭田・田名場,2012)で得られた結果を基にして、各得点のパーセンタイル順位を算出した。同様の目的で、蛭田・田名場(2012)の質問紙調査結果の自己愛傾向と攻撃性の中央値をもとに、調査協力者を高群か低群に位置づけた。その際、蛭田・田名場(2012)の質問紙調査協力者 98 名に本研究の調査協力者を加え、総数 99 名に対する順位と群への位置づけを算出した。群への位置づけに際して調査協力者の得点を加えたところ、小数点第 2 位で四捨五入を行う場合の中央値に蛭田・田名場(2012)との違いは認められなかった。結果を表 5 に示す。表中の「得点」における斜線の左側は調査協力者の合計得点、右側は尺度上の最高値、「得点率」は尺度上の最高値に対する合計得点のパーセンテージである。

なお本研究の目的が個人の内的過程の検討にあることから、質問紙調査の結果によって単に個人の自己愛傾向と攻撃性の高低をとらえるばかりでなく、その結果を解釈して、対人場面や攻撃性喚起場面で考えられる言動の特徴についてもおよその見通しをもつことが肝要と考えた。そこで、表 5 に示した調査協力者それぞれの自己愛傾向と攻撃性の高低から、対人場面での特徴を解釈し、以下のようにまとめた。

表 5. 質問紙調査の結果

蛭田・田名場(2012)による質問紙調査の結果(N=98)					X				Y			
	尺度	下位尺度		中央値	得点	得点率	パーセンタイル順位		得点	得点率	パーセンタイル順位	
					64/100	64	75		41/100	41	13	
自己愛傾向	無関心型 NPI-S	無関心型全体		57	38/ 50	76	99		24/ 50	48	37	
		下位尺度	自己主張性	25	26/ 50	52	29		17/ 50	34	3	
			優越感・有能感	30								
	過敏型 NVS	過敏型全体		60	64/100	64	60		53/100	53	29	
		下位尺度	承認・賞賛過敏性	16	22/ 25	88	78		20/ 25	80	67	
			自己顕示抑制	17	12/ 25	48	12		12/ 25	48	12	
			潜在的特権意識	12	11/ 25	44	34		9/ 25	36	18	
			自己緩和不全	14	19/ 25	76	74		12/ 25	48	34	
		外向攻撃性全体		60	57/110	52	41		50/110	45	16	
攻撃性	外向攻撃性 BAQ	下位尺度	身体的攻撃	15	11/ 35	31	18		11/ 35	31	18	
			言語的攻撃	13	17/ 25	68	82		8/ 25	32	4	
			敵意	17	15/ 35	43	23		18/ 35	51	53	
			短気	14	14/ 25	56	47		13/ 25	52	41	
	内向攻撃性 AAQ	内向攻撃性全体		33	31/ 60	52	38		38/ 60	63	69	
		下位尺度	自責感	24	24/ 35	69	47		27/ 35	77	70	
			自己破壊行動	8	7/ 25	28	32		11/ 25	44	69	

1) X の自己愛傾向および攻撃性の特徴

X は無関心型・過敏型全体ともに高群、外向・内向攻撃性全体ともに低群となった。下位尺度では「自己主張性」が 99 パーセンタイル、「言語的攻撃」が 82 パーセンタイルと高く、「自己顕示抑制」が 12 パーセンタイルと低い順位を示し、周囲に気兼ねなく自分の意見や考えを述べる傾向をもつと考えられる。一方で、「承認・賞賛過敏性」が 78 パーセンタイル、「自己緩和不全」が 74 パーセンタイルと比較的高い順位を示している。「承認・賞賛過敏性」の下位尺度は、「相手が私を避けているように思えると、私は非常に落ち込んでしまう。」「他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が無視されているように感じることもある。」など、他者からの承認や賞賛の敏感さに関する項目が含まれている。「自己緩和不全」の下位尺度は、「つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する。」「不安を感じている時には、誰かから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない。」など、自分の感情の調整に他者を必要とすることに関する項目が含まれている。X は様々な場面で積極的に自分の意見や考えを主張できる一方で、こうした発言が周囲の人に受け入れられていないと感じたり、思うような反応が得られなかったりすると、無視されているように感じて落ち込むといった傾向があると考えられる。

2) Y の自己愛傾向および攻撃性の特徴

Y は無関心型、過敏型全体ともに低群、外向攻撃性全体低群、内向攻撃性全体高群となった。下位尺度に注目すると、自己愛傾向および外向攻撃性の下位尺度については総じてパーセンタイル順位が低い。中でも「優越感・有能感」が 3 パーセンタイルと低い順位を示しており、自分の才能や長所について自覚的でない、あるいは消極的な認知をもっている様

子がうかがえる。「承認・賞賛過敏性」は 67 パーセントイルと比較的高い順位を示しており、自分の言動が注目されなかったり批判されたりすることにやや敏感であることが示唆される。一方で「自己顕示抑制」が 12 パーセントイルと低い順位を示している。「自己顕示抑制」の下位尺度は「他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがある。」「『自分のことを話しすぎた』と思って、自己嫌悪におちいることがある。」など、過剰な自己顕示の認知を前提とした後悔に関する項目群で構成されている。この点、「自己主張性」が 37 パーセントイルと低い順位を示していることを考えると、そもそもの自己表出の程度が低いので、過剰な表出を後悔する機会が少ないとも推察される。また、内向攻撃性および下位尺度が総じて高い順位を示しており、「不愉快なことでも無理に我慢してしまう」(下位尺度「自責感」)、「自分を傷つけたくなる」(下位尺度「自己顕示抑制」)傾向が高いととらえられる。自己愛傾向の根本的特徴である誇大な自己像を反映すると考えられる尺度「優越感・有能感」や「潜在的特権意識」(18 パーセントイル)などの順位が低いことも考え合わせると、Y は自己愛傾向の低い者としては特異な対人過敏性をもっているように思われる。

3.2. 面接調査の分析方法と結果

1) 攻撃性喚起場面における個人の内的過程の検討に向けた攻撃性の分類項目の設定

面接調査の分析に先立って、攻撃性喚起場面における個人の内的過程を分析する際に、喚起された攻撃性の変遷を自己愛傾向との関連を視野に入れて検討するためには、エピソード中のそれぞれの時点で語られる攻撃性がどのような特徴をもつか、できるだけ詳細に分類する必要があると考えた。坂井・山崎(2004)によると、攻撃行動は反応的攻撃と道具的攻撃に大別される。反応的攻撃は「外からの刺激に対して怒り感情を伴い、何らかの攻撃行動を示し、道具的攻撃は「目的を達成するために何らかの攻撃行動を道具として使用し、怒り感情を伴わない場合も多い」。さらに反応的攻撃は外からの刺激に対して怒り感情が伴ったあと、行動として表われる場合(表出性攻撃)と表われない場合(不表出性攻撃)に分類される(坂井・山崎,2004)。一方、本研究で使用した質問紙調査の攻撃性下位尺度には、外向攻撃性の「言語的攻撃」「身体的攻撃」「敵意」「短気」、内向攻撃性の「自己破壊行動」「自責感」が設定されている。これらの概念規定を前提に、以下では坂井・山崎(2004)の分類に質問紙調査の攻撃性下位尺度を当てはめて統合し、本研究での攻撃性の分類項目として再設定する。

a. 外向攻撃性 外向攻撃性の各下位尺度の質問項目は、おおむね他者からの害意や暴力、衝動的な怒りなどを前提とし、何らかの刺激に対して生起する攻撃性を測定している。この点から、本研究で用いた外向攻撃性の下位尺度は反応的攻撃に位置づけることができる。さらに「言語的攻撃」「身体的攻撃」が実際の行動に向かう攻撃性を、「敵意」「短気」が認知、感情面の攻撃性を測定する下位尺度であることから、言語的攻撃や身体的攻撃を表出性攻撃、敵意や短気を不表出性攻撃と位置づけることができよう。

b. 内向攻撃性 内向攻撃性の各下位尺度の質問項目をみると、「自責感」については対人場面でのストレスや不特定の出来事から自分についての否定的な認知が引き起こされることに関する項目がある。一方で、この「自責感」の他の項目には「不愉快なことでも無理に我慢してしまう。」「他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い。」など、自分を責める気持ちが明確に示されていない項目も含まれている。それでも、下位尺度としての「自責感」は $\alpha = .76$ の内的整合性を示している(安立,2001)。以上から「自責感」という概念自体に、フラストレーションを内包させ表出しないという心的エネルギーの方向性が定まらない状態が包含されていて、自分を責めるという明確な方向性をもった状態とそれが併存している可能性も考えられる。また、「自己破壊行動」については、「自分を傷つけたくなる時がある。」「自分の皮膚をかきむしりたくなることがある。」など、その前提となる刺激の別に関わらず自分に向かう攻撃行動に着目した項目で構成されている。これらから「自責感」「自己破壊行動」は、反応的攻撃とも道具的攻撃とも、あるいは表出性攻撃とも不表出性攻撃とも一概には言い切れないと考える。特に自己破壊行動は「対象に対する強い攻撃性が潜んでおり、間接的な他者攻撃という側面が存在する」(谷口,1994)、抑うつ気分からの解放の要因、自己陶酔の要因、他者操作の要因が動機になる(柏木,1988)とも指摘され、複雑な動機が関連しているとも考えられる。以上から、内向攻撃性については、文脈上の意味にも注目して分析する必要があると本研究では考える。そこで内向攻撃性については坂井・山崎(2004)の分類に当てはめず、エピソードの文脈に沿って外からの刺激や怒り感情の有無なども推測し、反応的または道具的、表出または不表出といった視点を参考にしながら具体的な検討を試みたい。

c. 道具的攻撃 道具的攻撃は、外界に働きかけるための道具として用いられる攻撃性を表わすので、表出性攻撃に分類できる。山崎(2002)によると、道具的攻撃には関係性攻撃が含まれる。関係性攻撃とは自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する行動で、仲間外れにしたり悪口を言ったりして、相手が嫌われる、社会的に排除されるように仕向けるなどを指す。他者を操作するという点に関して、DSM-IV(APA,1994)ではNPD患者が「対人関係で相手を不当に利用する」特徴に着目しているが、パーソナリティとしての自己愛傾向においても同様の特徴を考える必要があろう。そのためここまでにまとめた攻撃性の分類項目に関係性攻撃の概念も取り入れ、攻撃性をとらえる際の視点の一つにしたい。

以上から攻撃性の分類項目を表 6 のように設定し、この分類項目を軸に面接調査の分析を行う。

表 6. 攻撃性喚起場面における個人の内的過程を検討する際の攻撃性の分類項目

喚起時の分類	表出/不表出の分類	方向性と表われ方の分類	
		外向攻撃性	内向攻撃性
反動的攻撃 外からの刺激に対して怒り感情を伴って生起する。	表出性攻撃	行動的	言語的攻撃 身体的攻撃
	不表出性攻撃	認知的 感情的	敵意 短気
道具的攻撃 目的を達成するために攻撃行動を道具として使用する。 怒り感情を伴わない場合も多い。	表出性攻撃 (関係性攻撃)	行動的	無視、悪口、 仲間外れなど

2) 面接調査の結果

攻撃性喚起場面における個人の内的過程について、ワークシートの回答に基づいた面接調査を行った。録音データから逐語録を作成して、出来事、喚起された攻撃性、内的過程の変遷などについてまとめた(表 7)。見出された要素を基に調査者が面接調査の内容を振り返り、調査協力者 X と Y それぞれの内的過程について自己愛傾向の影響を念頭に、攻撃性の方向に注目しながら、発言や文脈から推測された要素も加えて解釈した。なお、「」を用いた部分は調査協力者の発言を引用している。

また、X と Y は自分と“とてもよく似た感じ方、考え方をもっていて、感じたり考えたりすることや実際に行うことが手に取るように分かる”架空の人物 A について想像し、攻撃性喚起場面を語った。そのため各調査協力者が A に投射する程度は調査協力者ごとに異なり、場合によっては大きく駆け離れたエピソードが語られる可能性もある。そこで面接調査終了時に“A のことを十分に話せたと感じる程度”を 0~10 の段階で評価するよう求め、間接的な指標とした。結果、X、Y 各々が 8~9 と回答し、かなりの程度十分に A について話せたと感じていた。また面接調査の感想として、X は「私が(中略)あったことに近いことを書いてる」、Y は「A さんのことを想像して(中略)、気づいたら自分のことを話してる」と語られたことから、X、Y 共に、A に自身をかなりの程度投射したものと判断した。そこで本研究では A の話が X、Y それぞれの体験に近い内容であることから、以降においては A を X と Y の調査協力者名に置き換えて記載する。

表 7. 攻撃性喚起場面における個人の内的過程

検討項目	X	Y
面接時間(ワークシート記入時間を含む)	1 時間 13 分 31 秒	1 時間 17 分 28 秒
出来事の主題	友人関係	友人関係
時期	入学後間もなく、3 か月ほど前	半年前
場面	大学、休み時間	大学、忙しい状況
登場人物	友人 B、 X と友人 B が所属する友人集団、別の友人集団	友人 D
攻撃性が向けられた対象	友人 B	友人 D
攻撃性が喚起された理由	不公平感、反感、疎外感	裏切り
喚起された攻撃性、感情	認知的攻撃、不安	「裏切り」エピソードの説明による怒りの喚起
喚起時に志向された行動	言語的攻撃行動	認知的攻撃
実際の行動	沈黙、不快感の表出	関係性攻撃行動
志向と実際の行動の一致/不一致	不一致	一致
不一致/一致した理由	向社会的要因	一致
行動による気持ちの変化	不快感が維持	怒りが軽減、罪悪感
行動による周囲の変化	気遣い	同情、友人 D への悪感情
周囲の変化により生じた感情	自責感、申し訳なさ	罪悪感、不安全感、納得のいかなさ
行動を変化させる可能性をもつ要因	友人 B および別の友人集団との親密度	状況
もたらされる変化	疎外感の解消	「自分が悪かったところ」の開示
過程の頻出性/特異性	頻出	特異
頻出点/特異点	沈黙、不快感の表出への自責感	意図しない怒りの喚起、怒りを表出した相手

※友人 B、C、D は各調査協力者のエピソードに登場した人物を分析の便宜上置き換えた呼称である。

a. X の攻撃性喚起場面における内的過程

X が攻撃性を喚起させられた場面として語ったのは、互いに知り合って 2 か月ほどの友人集団での出来事である。X は、自分と同じ友人集団に所属する友人 B が、X 達の集団成員と別の友人集団の成員達とで異なる接し方をすることに、不公平感、反感、疎外感を感じた。喚起された攻撃性は B に対する認知的な攻撃性で、X は B に話しかけている努力が報われず、B が別の友人集団に「媚びている」と感じた。X は別の友人集団と話すほど親しくないのに、B と別の友人集団との会話に X が所属する友人集団が加わっても、自分が加わる気は起きない。X は B に対して「なんなの」「ムカつく」「怒っちゃう」といった感情が生じる。同時に少し、「自分といっても楽しくないのかな…」と不安な気持ちにもなる。この時、X は B に対して「気持ちを全部ばっって」「言葉に出したい」、言語的な攻撃を行いたい気持ちがあるが、実際には「不機嫌な表情で黙」りこんだ。B に対して「キレちゃう」ことで、X が周囲から「どう見られるかっていうのも同時に考える」

ためである。『まあ良いや』って割り切れるのが理想」だが、「ムカつく」気持ちを「完璧に取り切れない、取り去ろうと思えない」ので、X が所属する友人集団の成員から「大丈夫？元氣ないね」と気にされたり「話さないの？」と誘われたりしても「煮え切ってない」ので『んー…』って黙ってる」という選択をする。そうして周りに『(X が)静かだな』って思わせちゃう。すると「自分ってなんでこうなんだろう」と自責的な気持ちになる。不機嫌そうに黙りこむという選択のあと、B への「もやもや」した気持ちが継続し、自身が所属する集団の友人達に対する「申し訳なさ」、「自分を責める」気持ちも加わった。この過程が変容するのは、B および B と話している別の集団の友人達と「会話量が増えてたり」「仲良くなったりする」、すなわち親密度が上がった時である。X は「B のことが受け入れられ」て「B がいない所でも(別の集団の友人達と)話す機会がある」と、B と別の友人集団が話している時も「話そうって気持ちが生まれる」「ムカつくって方向にはつながらなくなる」と締めくくった。

「ムカつく」と沈黙し、『自分ってめんどくさい』って思う」過程は、X によくある気持ちの流れのようである。X は「自分の意見を言わない人にはムカついちゃう」「黙って一人で行動しちゃう」と自己分析もしていた。

質問紙調査の結果については、周りに合わせたほうが良い場面があることは分かるが、自分の考えと違うと思ったら、後から『こう思ってたんだけどなあ』っていうのが残る」ので、「めっちゃ言っちゃう」。自分ではもっと敵意や言語的攻撃性、自責感が高いと思う。悩みや不安、激しい感情を抱えている時には、「本当は凄くなだめてほしい」。しかし「話すと思ひ出して余計悲しくなる」、「心配はされたいけど相談はしたくない」「気づいてなだめられると凄く嬉しい」。「どう思われてるか、嫌われてないかとか気にすることが多い」「馬鹿にされたとか感じることは少ない」。自責感に駆られても「友達とかお母さんとか」に「受け入れられてるなって思ったら、そこで一旦リセットされる感じがする」と語った。

b. Y の攻撃性喚起場面における内的過程

Y が攻撃性を喚起させられたのは、友人 C と話している際に C がある友人から「裏切られた」話を聞いた時の出来事である。Y は C の話を聞いて自身が友人 D から裏切られた時のことを思い出し、『私もこんなことあったよ』と話している内に、当時のことが自分の中で整理され、D に対して「いらいら」「許せない」と怒りの気持ちが湧き起こった。当時 Y は D の裏切りに「多少引っかかりを感じたが、「周りが忙しい状況」で「追及している場合ではなかった」ために「流しちゃった、許しちゃった」という。C と話している内に「怒りが」「抑えきれなくなつて」、Y は C に、D に対しての「暴言を吐き」「悪口」を「言ってやりたくなった。実際のところ、Y は「自分が悪かったところ」を「間引いて」「D さんのことがより悪く聞こえるように説明した」。そうした結果、「(悪口を)言ってやる」という気持ちが「悪く説明」する程度に「マイナスされた」(「悪口」は「あることないこと吹き込むこと」で「悪く説明する」ことのほうが「軽い」)という。C は Y の話を聞いて、Y に同情し、D を『酷いね、悪い人だね』と評した。Y はそれを受けて「私もちょっと悪かったかもしれないのに、そのことを言わないで話している」ので、「あんまり良い気持ちはしない」。「半分は意図してやったけど」結果的に「D さんの評判が下がる」ので、『悪いことしたなあ』って思う。Y は当時の引っかかりが激しい怒りとして思い出され、衝動的に D を「悪く説明」したことで怒りは軽減された。しかし、この過程は「不用意にっていうか」「急に思い出して話をしたから」、「いまいち(怒りを)発散するに至らなかった」特殊な過程である。C は Y にとって「あんまり親しくない相手」で、『Y さんってそういうところもあるんだあー』って自分をマイナスに取られるかもしれないと思うと「自分が悪かったところ」は「話せない」。そのために自身の悪かった点を話していない状態で何を言われても「怒りが薄まらない」「納得できない」。この過程が変容するのは「親しい人に話すか、物に当たる」時だという。親しい人なら自分が悪かったところも「含めて認めてくれそう」。同情されたら「よく言えないけど」「自信になる？」し、「どっちもどっちだね」といわれても「納得がいく」。

質問紙調査の結果については、「劣等感が凄い」。「主張しないし」「議論いやだなあって思う」ので、自己主張性の(予想以上の)高さや自己顕示抑制の低さは「意外」とのことである。「人が廊下で笑ってると自分が笑われているような気がする」ことがままある。いらいらしてというよりは「ぼーっとしてるときとか、考え事してるときに」、ささくれを剥いたり頭を軽く叩いたりすることがあると語った。

4. 考察

4.1. X の自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について

X の攻撃性喚起場面の内的過程では、X が、相手によって異なる接し方をする友人 B に対して反応的な外向性の認知的攻撃性を喚起すると同時に、「自分と話していてもつまらないのだろうか」と不安も感じる様子が語られている。自己愛傾向と攻撃性の特徴から、X には気兼ねなく自分の意見を主張する一方で、発言が注目されなかったり受け入れられなかったりすると、そのことを敏感に気に掛ける傾向が認められた。エピソードとこの特徴から、X が感じた不安は B への働き

かけに思うような応答がなかった、承認されなかったことに起因していると考えられる。Bの態度はXの言動に応答しないという点でXにとって一種の脅威になったのではないだろうか。「何なの」「ムカつく」というBへの攻撃性は、ともすれば「折角この私が話しかけてあげているのに」という無関心型の特徴である優越感・有能感に基づいた攻撃性にとらえることもできる。しかし、Xの優越感・有能感が低いと言う特徴から考えると、Bに対する攻撃性は、“無視された”ことへの防御反応としての攻撃性、つまり過敏型の特徴に基づいた脅威の感知と防御反応にとらえることが適当だろう。こうして生じたBへの認知的攻撃性は、不満を伝えたいというBへの言語的攻撃性志向に移行する。この点には一転して、無関心型の自己主張性の特徴が反映されているようにみえる。しかし、Xは実際のところ「周囲からどう思われるか」が気にかかり、納得できないけれど言えないという葛藤に陥り、打開策として「不機嫌な表情で黙る」ことを選択した。言語的攻撃の表出が過敏型の特徴である承認・賞賛過敏性に基づいて阻害されたと考える。とはいえ表出と抑制の葛藤は「もやもや」として残り継続することから考えて、無関心型における自己主張性や過敏型における自己顕示抑制と自己緩和不全とが対立し、さらに過敏型の承認・賞賛過敏性の影響が高い水準で影響を与えていると推測する。この葛藤に対して不機嫌に沈黙するという行動は、特定の対象に向けた攻撃性を、対象を定めずに表出することで対処したととらえられないだろうか。Xは不機嫌そうに押し黙ることで周囲に自分の感情を主張したと考える。また、Xは質問紙調査の結果について、「心配はされたいけど相談したくない」「気づいてなだめられると嬉しい」と語っている。こうしたことからXの感情緩和方略は、単に誰かに話したいという様態よりも、聞き出してほしい、察してほしいという他律的、受動的な様態であると考えられる。同時に、周囲の友人たちがお喋りをする中で1人沈黙できる背景には、Xが友人集団に対して自らの沈黙が受け入れられるだろうという見通しがあるからだと解釈できる。Xは友人集団に自身の感情の緩和を期待しているといえるかもしれない。外向攻撃性を不特定、あるいは感情緩和が期待できる外的対象へ表出するという様態には、Xの過敏型の自己緩和不全の影響が特徴的に反映されているようである。Xの沈黙に対して周囲の友人たちは「話さないの?」「元氣ないね」と声をかけた。これを受けてXは「申し訳ない」「自分ってめんどくさい」と感じた。Xの感情緩和方略の最適型が、“気づいてなだめられる”ことであるとすると、友人たちの働きかけはXの「心配はされたいけど相談したくない」心性に作用しており、最適な情動緩和方略とは異なっている。そのためXの、いわば宙に浮いた状態である外向攻撃性は解消されるまでには至らなかった。そこでXの攻撃性はさらに変容して、一部は「もやもや」として保持されたまま、一部は罪悪感や自責感として内向したと考える。

4.2 Yの自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について

Yの攻撃性喚起場面で特に目を引くのは、過去に見過ごされた攻撃性が、その対象となった友人とは別の友人との会話をきっかけに顕著に再燃する点である。Yは友人Dの裏切りに「引っ掛か」りは感じたものの、「周り」の「状況」のためにDを許す素振りを示し、その場を収めた。自分の感情よりも周囲の状況を優先したととらえられ、Yの過敏型における承認・賞賛過敏性が反映されていると考えられる。その後、Yは友人Cとの会話をきっかけに当時の状況を整理するうちに、「気持ちを抑えられない」ほどの怒りを感じて「暴言を吐く」「悪口を」「言っやる」という気持ちになった。この時のYの様子からは言語的攻撃欲求に先駆けて怒りと衝動性がうかがわれ、外向攻撃性の認知、感情的側面である敵意、短気が賦活していると理解される。Yの自己愛傾向と攻撃性の質問紙調査結果に目を向けると、敵意と短気は中程度の順位を示しており、Yの攻撃性の特徴に面接調査と質問紙調査との結果の隔たりが認められた。そこであらためてYの自己愛傾向と攻撃性の特徴をみると、自己愛傾向では過敏型の承認・賞賛過敏性以外の下位尺度が18~34パーセンタイルの順位に留まっているのに対して、承認・賞賛過敏性のみが比較的高い順位を示している。Yの承認・賞賛過敏性が他の自己愛的特徴と比較して優位であることにより、周囲から批判されるような言動が慎重に回避されているとも考えられる。また、質問紙調査時にYは、一般的あるいは個人的に望ましい回答をした可能性も考えられないわけではない。もしこのような回答の調整がなされたと考えると、敵意や短気が中程度認められたことには、むしろYの認知的、感情的な攻撃性が結果以上に高い可能性も考える必要があるのかもしれない。Yのエピソードに目を戻すと、Yは生じた言語的攻撃の志向に添って、自分の悪いところを「間引」き、Dのことが「より悪く聞こえるよう」にCに説明した。Yの行動は怒りを伴った反動的かつ道具的、関係性攻撃ともいえる。しかしYは、その関係性攻撃を行いながらも「自分が悪かったところも思い出」したことで、「悪口」ではなく「悪く説明」する程度に攻撃性を抑制している。さらに、「悪く説明」したあともDの「評判が下がる」ことになるので「悪いことしたな」と冷静に自らの行動の結果を分析し、反省している。攻撃性喚起時点での怒りや言語的攻撃欲求の激しさから比較すると、Yの関係性攻撃はYの内部でかなり抑制され調整された後に表出されている様子がうかがえる。この抑制については、YがCに「経緯を説明する」という、出来事を客観視しやすい状況であったことも無関係ではないだろう。しかし、「自分が悪かったところ」を説明しなかった理由が「自分をマイナスに取られるかもしれない」ので「話せな」かったからであることをふまえると、Yの関係性攻撃の抑制にはYの承認・賞賛過敏性の高さが象徴されていると考える。Yは衝動的に関係性攻撃を行ったが、その最中にも承認・賞賛過敏性が働き、

表出の程度が抑制され、「自分が悪かったところ」は「間引いた」。関係性攻撃によって D への認知的攻撃は軽減されたが、「自分が悪かったところ」を話していないので C から同情されても「納得できず」、解消には至らなかった。Y は「親しい人」になら「自分が悪かったところ」も含めて話すことができる。その時初めて「納得がい」き、攻撃性が解消されると考えられる。

4.3. 自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面の内的過程との関連について

本研究では、2 名の調査協力者について、自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面の内的過程との関連を考察した。

X の攻撃性喚起場面における内的過程には、無関心型および過敏型の特徴が共に高い場合の自己愛傾向が生み出す葛藤が反映されていることが推測された。すなわち無関心型の自己主張性が外向攻撃性の言語的攻撃の表出欲求を高める一方で、過敏型の承認・賞賛過敏性が脅威の認知および防御反応としての敵意を生じさせる反面、それ以上に攻撃性の表出方法調整や抑制にもつながり、この両者が対立する過程としての葛藤である。加えて、感情緩和方略については、こうした葛藤が過敏型の自己緩和不全の特徴をより他律的、受動的に反映した様態、つまり、対象を定めずに攻撃性を表出する行動に向かわせることが考えられた。

Y の攻撃性喚起場面における内的過程では、他の自己愛傾向下位尺度に比べ相対的に高い過敏型の承認・賞賛過敏性が、攻撃性の抑制に大きな影響を与えている点が特徴であった。また同時に、承認・賞賛過敏性によって一度は抑えられた攻撃性が何かのきっかけで再燃する際に、瞬間的に激しい怒りと衝動性を喚起する様子もうかがわれた。

X の喚起場面から、無関心型と過敏型の両方が高い場合には攻撃性の表出方法に葛藤を生じることが、Y の喚起場面から、自己愛傾向が全般的に低い場合でも、相対的に高い下位尺度(承認・賞賛過敏性)が攻撃性の表出抑制に影響を及ぼすことが示唆された。攻撃性の表出時では、X の攻撃性表出方法が周囲を気遣わせ、X の自責感喚起に繋がった。しかし一方で X は自らの攻撃性を完全に抑制することをよしとせず、自身の欲求に準じたともとれる。対する Y は喚起時に自身の感情よりも周囲の状況を優先させ、後に不測の表出によって不全感を感じた。攻撃性喚起時では Y の表出抑制の方が対人関係上波風を立てず好ましいように思われるが、その後の流れを追うと X の表出行動の方が結果的、相対的に当人の心的負担が少ないようにみえる。知り合って間もない友人集団内にいた X と多忙な状況下で友人に裏切られた Y とを単純に比較することはできないが、Y のように過敏型の注目・賞賛欲求のみが相対的に高い場合よりも、X のように自己愛傾向が全般的に高い場合の方が、攻撃性の表出を行いやすく、また表出できる分、攻撃性を当人にとって良好に軽減できるのかもしれない。一方で、両名が攻撃性の内的過程を変容させる要因に他者との関係性を取り上げつつ、X の感情緩和方略は<悲しくなるので自分からは話したくない、気づいてなだめてほしい>と他者依存的で、Y の感情緩和方略は<親しい人には自分の悪いところも含めて話せる。肯定されても否定されても納得できる>と比較的自律している点にも触れておきたい。X の感情緩和方略には過敏型の自己緩和不全と承認・賞賛過敏性が、他者に気持ちを受け入れてほしいがどう思われるのか気がかりだという葛藤として複合的に影響しているさまがうかがえる。この方略は、他律的な要因に依存する部分が多いために感情緩和を達成できる可能性が変動しやすいと考える。対する Y の方略では親しい人にありのままの自分を開示する様子が語られており、相対的に高い承認・賞賛過敏性の影響が限定的に及ばない、信頼できる人物との関係が重視されていると思われる。能動的に相手を選択して働きかけ、その反応によらず感情を緩和できるという点で、Y の方略の方が安定した感情緩和を可能にしているのではないだろうか。このように、感情緩和方略については、過敏型が高い場合に下位尺度間で葛藤を生じたり、自己愛傾向全般が低い場合に安定した方略が示されたりする可能性が示唆された。

5. まとめと今後の展望

本研究では外向・内向攻撃性が自己愛傾向の無関心型、過敏型という 2 つの型によって異なる様相をもち、さらに相手との関係性などによってその表出が変化するものと仮定して、自己愛傾向と攻撃性の関連について個人の内的過程に着目した検討を行った。その結果、無関心型と過敏型は攻撃性喚起場面の内的過程や攻撃性の軽減にまつわる当人の心的負担などに異なる影響を及ぼすことのみならず、無関心型と過敏型が共に高い場合には攻撃性の表出や感情緩和方略に関する葛藤を招くこと、自己愛傾向が全般的に低い場合でも、相対的に高い下位尺度が攻撃性の表出抑制に影響し、一方で安定した感情緩和方略を示す可能性があることが示唆された。

なお、本研究では、蛭田・田名場(2012)の研究結果に基づき、質問紙調査で自己愛傾向と攻撃性の個人的特徴を描き出しているが、今後自己愛傾向と攻撃性との関連を検討する際にも、こうした一般性と個人差の両面からのアプローチは有効であると考えられる。また、面接による語りから自己愛傾向と攻撃性喚起場面における内的過程へ詳細にせまるアプローチに加え、質問紙調査などによって対人場面での自己愛傾向の特徴についてある程度のモデル化ができるならば、その併用

によって面接調査結果の検討に有益な視点が得られるとも考える。さらに、今後攻撃性喚起場面における個人の内的過程が明らかになるにことで、調査協力者に対して検討対象となる要因や視点をより分かりやすく提示することが可能になれば、将来的には本研究で使用したワークシートなどの、個人が自らの特徴に基づいた健康的な対処方法を考えるための材料を呈示しての心理臨床活動に繋がっていくことが期待される。

文献

- 相澤直樹 1999 ナルシズムに関する一考察—現象・病態像、及び、精神力動論の再整理の試み— 大阪大学教育学年報, **4**, 171-186.
- 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 475-487.
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistic manual of mental disorders: Fourth edition*. Washington, D.C. : Author. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳(1995) DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル医学書院).
- 浅利仁美 2013 自己愛のサブタイプによる対人場面での特徴についての研究 福山大学こころの健康相談室紀要, **7**, 83-89.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性徴問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- 福井敏 1998 誇大的な自己—自己愛性障害— こころの科学, **82**, 75-80.
- 福島さおり 2007 攻撃性と自己愛傾向の関連性について 臨床心理学研究, **33**, 38.
- フロイト, S. (懸田克躬・高橋義孝訳) 1969 ナルシズム入門(フロイト著作集第5巻) 人文書院.
(原著: Freud, S. 1914 *On narcissism; an introduction*. in *Complete Psychological Works*, Standard ed, vol.14, London, Hogarth Press 1949).
- Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, D.C. American Psychiatric Press. (館哲郎監訳 1997 精神力動的精神医学 ③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版).
- 蛭田陽子 2011 自己愛傾向をめぐる概念の検討と研究展望—無関心型および過敏型自己愛傾向と攻撃性との関連に着目して— 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **8**, 7-21.
- 蛭田陽子・田名場忍 2012 自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連—無関心型および過敏型自己愛傾向に着目して— 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **9**, 18-30.
- 池田政俊 2010 自己愛—ナルシズムについての考察 帝京大学心理学紀要, **14**, 53-74.
- 上地雄一郎・宮下一博 2009 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, **17**, 280-291.
- 柏木勉 1988 Wrist Cutting Syndrome のイメージ論的考察—23 症例の動機を構成する 3 要因の検討— 精神神経学雑誌, **90**, 469-496.
- 川上正憲・宮田久嗣・杉村共栄・中村文子・小野和哉・牛島定信 2001 自己愛性人格構造が基盤にある症例について—境界性人格水準と神経症性人格水準にある 2 症例を通して— 臨床精神医学, **30**, 533-537.
- Kernberg, O.F. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- コフート, H. (水野信義・笠原嘉訳) 1994 自己の分析 みすず書房.
(原著: Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press.).
- 前川恵里・宮本正一 2006 自己愛傾向と対人態度の関連 東海心理学会第 55 回大会発表論文集, **56**.
- 中川美保子 2004 過剰な攻撃性を表出する青年への援助について 京都大学大学院教育学研究科紀要, **50**, 413-425.
- 中村晃 2004 健全な自己愛と不健全な自己愛 千葉商大紀要, **42**, 1-20.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 2004 自己愛傾向と大学生活不安の関連 中部大学人文学部研究論集, **12**, 67-77.
- 小野和哉 2005 高齢者の自己愛性人格障害 老年精神医学雑誌, **16**, 560-566.
- Raskin, R. & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- 相良麻里・相良陽一郎 2004 青年期における自己愛に関する研究—攻撃性との関わりにおいて— 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **13**, 151.
- 坂井明子・山崎勝之 2004 攻撃性概念の細分化と形成過程 美作大学短期大学部紀要, **49**, 1-7.
- 谷口奈青理 1994 青年期女子における自己破壊傾向と母子関係について 京都大学教育学部紀要, **40**, 277-288.
- 山崎俊輔 2008 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究, **9**, 143-151.